



TITLE:

情報環境の整備と電子図書館

AUTHOR(S):

長尾, 真

CITATION:

長尾, 真. 情報環境の整備と電子図書館. 静脩 1994, 30(4): 1-2

ISSUE DATE:

1994-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37242>

RIGHT:

情報環境の整備と電子図書館

工学部教授 長 尾 眞

1 情報環境の変化

最近小説家でもワープロを使って書き、フロッピーディスクや電話線を経由して小説を出版社に送る人が増えて来ているという。学生はレポートを電子メールシステムで先生の計算機に送り込むという形でレポート提出をする講義もあちこちの大学で行なわれるようになって来た。学術論文を国際的な電子メールシステムに乗せて投稿し、それが査読者に電子的に送られ、受理された論文の発表も計算機上で行なわれるというのは我々の世界では当たり前になっている。世界各地の図書館で目録などが電子化され、日本からもこれらを自由に検索できるようになっていることは想像以上で¹⁾その活用法を知っているといえないとは決定的な差が出て来ることになるだろう。

出版は既にCD（コンパクトディスク）で行なわれるようになってきている。そのうちに毎日の新聞は電子的に配達され、電子ブック的な形のポータブル装置の上で読むという時代になるだろう。これは世界の紙資源（木材）が枯渇することと、新聞配達の人が働えなくなることからそうならざるを得ないのである。情報が電子化される傾向は文字の世界だけでなく、音や写真、映像（テレビや映画）の世界にも広がり、こういったマルチメディア情報が全て計算機に入れられ、あるいは計算機で作られ、計算機ネットワークを経由して欲しい情報がいつでもどこでも自由に入手できるという情報環境の時代が来るだろうと言われている。

2 電子図書館²⁾

図書館が収集し利用に供する対象が、本や雑誌の形態でなくこのような電子的な形で生産されるようになって来ると、それを受け入れる図書館自体の構造が抜本的に変わって行かざるを得ない。これから出版されるものは電子的なものであるから、電子納本が行なわれるという時代が来るだろう。電子納本の場合には、その検索と利用の仕方が本で納本される場合に比べて格段に自由であり、図書館側も手間が省ける。関西文化学術研究都市に近く設立されようとしている国立国会図書館関西館は、このような21世紀の情報社会における電子図書館を目指して構想が立てられ、具体化への検討が進んでいる。大学の研究室や各家庭から自由にこの電子図書館を呼び出し、自分の必要とする図書・資料を瞬時に手元のパソコンに取り出して来れると言うわけである。

その時代のパソコンは現在のものとは全く違ったマルチメディア対応の優れた能力を持つものになっていることは確実である。本と全く同じイメージを画面に取り出すことが出来、必要に応じて挿入されるものはカラー写真だけでなく動く映像の場合もある。読むのが面倒な場合には機械が朗読して聞かせてくれる。分からない言葉が出てくるとすぐ辞書引きした結果も並行して見せてくれるし、関連資料などもすぐ引き出せるという、いたれりつくせりのシステムが実現しているだろう。これは夢物語ではなく、実験的なものは既に開発されている。

3 京都大学における情報環境の整備と教育

このような理想的な状況が広く実現するのは紀元2010年あたりまで待たねばならないかもしれないが、現在でもある程度のことは出来る。またこのような情報環境の整備は日進月歩の勢いで進んでいるから、これを積極的に利用するかしないかでいやおうなく大きな差が出て来ることになるだろう。京都大学は全国の国立大学に先駆けて1990年1月学内に高速情報通信網（通称KUINS）を完成させ、学術情報利用の基礎を整備した³⁾。今日では数千台のコンピュータがKUINSに接続され、学内はもとより、国内・国外との情報のやりとりに日夜使用されている。しかし既に述べて来たような情報環境を作ることは急務であり、またこれを十分に活用するためには、大学全体として次のようなことを積極的に推進して行く必要があるだろう。

(a) 新しい情報環境利用のための教育の推進

- ・全学生にコンピュータ利用能力をつけさせる。レポートなどを電子的に送ったり、電子メール討論が自由に出来る能力をつけさせる。
- ・電子図書館や学術情報データベース活用の能力をつけさせる。(図書館情報利用法、データベースの種々とその検索法、情報分類の体系とハイパーテキスト検索等を含む教育)。
- ・マルチメディアシステムを利用した種々の教育システムを開発し、多人数教育ではあっても個人に合った教育が受けられるようにする。これは特に語学教育に有効であり、新しい概念のランゲージラボを提供する。

(b) 学内における情報環境の整備の推進

京都大学には既に種々の学術情報が電子化されており、多くの研究論文が計算機を使って書かれているので、これらをKUINSネットワークに接続して積極的に公開することが望まれる。京都大学便覧や教官

名簿、教官の研究分野などの冊子も電子化し、研究論文などと共に電子的に蓄積し公開すれば、京都大学電子出版発信局の誕生である。

- ・附属図書館を中心とする図書館の持つ情報を少しずつでもよいから出来るだけ速やかに電子化し、高度の情報サービスを提供することによって、利用者自身が必要な情報を自分で検索して自分の情報端末で自由に見ることが出来るようにする。
- ・そのためのKUINSの性能向上と優れた機能を持つマルチメディア端末の導入への努力はいうまでもないことである。

このような形で京都大学の持つ学術情報を広く全世界に発信することによって学問の進歩に貢献することも我々にとって大切な使命ではないだろうか。

1) 例えば、最近の雑誌「情報の科学と技術」44巻1号(1994年1月号)に次のような興味ある論文がある。

戸田慎一：ネットワーク情報資源と図書館・情報サービスの将来

宮崎智：インターネットの公開情報サービスの使い方

佐藤義則：インターネットの利用と大学図書館

広田とし子：インターネットの使い方——大学図書館における活用事例——

2) 電子図書館研究会：電子図書館の未来の姿、1993年12月（この研究会は筆者を含む数名の研究者が3年前から行なっている私的研究会、1994年秋に電子図書館のデモンストレーションを行なう予定）

3) KUINSは京都大学学術情報ネットワーク整備委員会の意向をうけて、京都大学学術ネットワーク機構が運営している。大型計算機センターの中に事務局がある。

お知らせ

図書館利用証を発行します

附属図書館と総合人間学部図書館は、自動入退館システムと、コンピュータ貸出方式（開架図書のみ）をとっており、附属図書館で発行する図書館利用証は、両館の入館証と貸出証を兼ねるものです。また理学部中央図書室の図書の貸出も出来るようになっていきます。

利用証の有効期限は、身分証の有効期限に準じて設定していますので、発行には、申請用紙に氏名、住所等を記入の上、身分証（学生証）の提示を必要とします。

学部学生と修士課程院生は、入学・進学の際の名簿を元に利用証を一括作成してありますので、申請用紙記入後、即時に利用証を受け取る事が出来ます。平成6年度の新入生・新院生の利用証の交付は入学